

第一章 朧月夜の君物語 春の夜の出逢いの物語

[第一段 二月二十余日、紫宸殿の桜花の宴]

如月の二十日あまり、南殿(なでん、紫宸殿)の桜の宴せさせたまふ(桜見物の酒宴を帝は御開きなさいます)。后、春宮の御局、左右(ひだりみぎ、玉座の左右)にして(に設けて)、参う上り給ふ(まうのぼりたまふ、観覧なさいます)。弘徽殿の女御、*中宮のかくておはするを(藤壺が後の中宮という自分より上座についている事には)、をりふしごとにやすからず思せど(事在る毎に不満を募らせておられました)、物見には(花見自体は)え過ぎしたまはで(楽しみにされてとても放っては置き為されずに)、参りたまふ(御出席なさいます)。 *「中宮(ちゅうぐう)」は後の座としては、首席の「皇后(おほきさき)」に対し次席の呼称とされる。元々は皇后事務を司る職掌名で、帝の正妻以外の者を後に立てるときに便宜上、尊称として使われたようだ。それが実質で首座を占めるのは、「皇后」が空席の場合である。正に今が其うである。帝は本来皇后に就くべき弘徽殿の女御には、貴方は近々皇太后になるのだからその際に正式に処遇すると言ひ包めて、今回は立后を見送り中宮宣旨だけをしていた。つまり、藤壺が上位に就くのは形式上で一時的なことだから大目に見ろ、である。弘徽殿は不服だったが、若宮を儲けた内親王を帝が晴れ舞台の首座へ厚遇することまで、表立って反対する事は社会通念上不可能だった、のだろう。

日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も、心地よげなるに、親王たち、上達部(最上位高官)よりはじめて(をはじめ)、その道のは皆(心得の有る者は皆)、*探韻賜はりて(たんいんたまはりて、お題を頂いて)文つくりたまふ(漢詩を御作りに為ります)。 *「探韻」は「韻字(漢詩を作る時、韻を踏むために句の末に置く字)を書いた紙を入れた鉢を庭中に立てた文台の上に置き、一人ずつ鉢に手を入れて韻字を探り取り、詩を作ること」と注釈にある。

宰相中将(さいしやうのちゅうじょう、源氏の公式呼称)、「春といふ文字賜はれり」と、のたまふ声さへ、例の(既に)、人に異なり(秀でていた)。

次に頭中将、人の目移しも(源氏の次で注目されて)、ただならずおぼゆべかめれど(それを感じて緊張も在った様だが)、いとめやすくもてしづめて(先ずは無難に落ち着いてこなして)、声づかひなど、ものものしくすぐれたり(堂々として立派だった)。

さての人びとは(その他の人々は)、皆臆しがちに鼻白める多かり(皆気後れがちに声を強張らせる者が多かった)。地下(ぢげ、帝への謁見が許されない中級以下の役人)の人は、まして、帝、春宮の御才(おんざえ、漢学に)かしこくすぐれておはします(造詣が深く鋭い選者で御出でで)、かかる方に(漢詩作りに)やむごとなき人(優れた人が)多くものしたまふころなるに(沢山お集まりの場で)、恥づかしく(気後れして)、はるばると曇りなき(晴れ渡る)庭に立ち出づるほど(庭に立ち並ぶだけでも)、はしたなくて(極まり悪くて)、やすきことなれど(何でも無い様でも)、苦しげなり(居辛かった)。

年老いたる博士どもの、なりあやしくやつれて(風采は上がらないが)、例馴れたるも(場馴れしているのも)、あはれに(枯れた風情があつて)、さまざま御覧ずるなむ(様々を御覧になる方にとっては)、をかしかりける(楽しい宴でした)。

楽どもなどは(奏楽の数々も)、さらにもいはずととのへさせたまへり(帝は言わずと周到に御揃えさせ為されて御出ででした)。

やうやう入り日になるほど(夕方近くになって)、*春の鶯囀るといふ舞、いとおもしろく見ゆるに(すぐく今の風情にあっているようで)、源氏の御紅葉の賀の折、思し出でられて、春宮、かざしたまはせて(頭に挿す花を源氏にお渡しになって)、せちに責めのたまはするに(頻りに一舞いを所望為されると)、逃がれがたくて(源氏も拒みかねて)、立ちて(舞台上に上がって)のどかに袖返すところを一折れ(ゆるりと袖を返す舞の型を一仕草)、けしきばかり(ほんの真似事で)舞ひたまへるに(踊りなされば)、似るべきものなく見ゆ(絵にも画けない美しさ)。*注釈に《春鶯囀(しゅんおうてん)の舞をいう。右方の高麗楽に対して左方の唐楽の壺越調の曲。襲装束に鳥兜を着け四人、六人または十人で舞うという。女楽である。源氏が一人で舞う。》とある。が、成る程と思える素養は、私には無い。

左大臣(養父は源氏に見とれて、娘との不仲の)、恨めしさも忘れて、涙落したまふ。(されば左大臣の義兄なる帝が)「頭中将、いづら(何処に居るのか)。遅し」とあれば(と御呼びなさんと)、

*柳花苑(りうかえん)といふ舞を、これは今すこし過ぐして(頭君は源氏の真似事よりは少し本式に)、かかることもやと(この様な事も有るか)、心づかひやしけむ(練習していたように)、いとおもしろければ(とても上手に舞ったので)、御衣賜はりて(おんぞたまはりて、帝は褒美に御衣をお与えになったが)、いとめづらしきことに人思へり(こうした麗々しい事は酒席の花の宴では珍しい事だと人々は思った)。*注釈に《これも左方の唐楽で双調の曲。四人の女舞。頭中将が一人で舞う。》とある。

上達部皆乱れて舞ひたまへど(高官たちは花の宴らしくほろ酔いで思い思いに入り乱れて踊り出していらしたが)、夜に入りては、ことにけぢめも見えず(もう無礼講だった)。

文など講ずるにも(漢詩の読み上げでも)、源氏の君の御をば(源氏の御作りに為ったものは)、講師も(かうじも、読み手も)え読みやらす(すらすらとは読み進めず)、句ごとに(一節ごとに)誦じ(ずじ、朗詠しては)ののしる(褒めそやす)。博士(はかせ、大学寮の教官)どもの心にも(たちの評価も)、いみじう思へり(感心頻りだった)。

かうやうの折にも(こうした時でも)、まづこの君を(他の御子たちよりやはり源氏が一番)光にしたまへれば(光り輝いていらしたので)、帝もいかでかおろかに思されむ(帝もどうして源氏を軽んじ為されましようや、いや格別に思われない筈は御座いません)。

中宮、御目のとまるにつけて(源氏の優美さに感じ入って)、「春宮の女御の強ちに(あながちに、偏狭に)憎みたまふらむもあやしう(源氏を憎む一方なのも奇怪しいが)、わがかう思ふも心憂し(私がそんな風に源氏の肩を持つのも忌まわしい)」とぞ、みづから思し返されける(煩悶為さる)。

「おほかたに花の姿を見ましかば、つゆも心のおかれましやは」(和歌 8-1)

「さても見事な花の宴、雲の一つも在りません」(意識 8-1)

*原文注釈に「藤壺の独詠歌。「花」は源氏を譬喩。「露」は「つゆ」(副詞)と「露」(名詞)の掛詞。「花」と「露」、「露」と「置く」はそれぞれ縁語。『完訳』は「前の「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」(紅葉賀)とも同じ発想で、「--ましかば--まし」の反実仮想の構文に源氏賞賛の心を封じこめる」と注す。》とある。「注」の引句は前の帖で、朱雀院の行幸に先立って清涼殿の庭先で行われた試楽における源氏の典雅な舞を見た藤壺の感想だった。さらに「紅葉賀」には試楽の翌日に藤壺が源氏と歌の贈答をして、其の文の結びに「大方には」と添えていた。其の時にも「大方=世間の目」が気になってしょうがない藤壺の胸の内を言っているとは思ったが、此处でまた「大方に」と言う所を見れば、藤壺が如何に「其れ」を恐れていたかを強調する作者の意図に留意すべきかと、少し考えてみる。「其れ」とは「世間の目」だが、当初は宿下がりとお目出度との日数が合わない事への嫌疑で、此れは物の怪の仕業で収まった。しかし、産まれて見れば余りにも源氏に似ていることが藤壺は気になったが、帝は其の美しさを喜ぶばかりだ。当人の二人以外に真相に肉薄した者は王命婦と中納言の乳母子だが、側近が減多な事を口にするはずは無い。「事の露見」は死を意味するが、実際に恐れるのは「事の信憑性」を蓋然化する「世間の目」だ、という所だろうか。少なくとも法を盾にとって、露見すれば許されない絶対禁忌を犯した、と論う書き方では無いようだ。と見返しても是等は言わずもがなの理屈で、此处は単に「大方に」と歌い出した藤壺の気持ちに、そういう深層心理が在ったかもしれないくらいに取ればいいのかもかもしれない。それに何も、この歌は恐怖心を訴えたものでもない。ざっと重ね読むと「一観客として花を挿した舞姿を拝見すれば、少しも後腐れ無く、皆さんと同じに美しさを感じ入って、涙を流さずには居られません」という讃辞である。否寧ろ、この歌で留意すべきなのは試楽の際の「心のなからまし」から「姿を見まし」と突き放している所なのではないか。つまり孕んでいる時は胎児だが、産まれ出しまえれば独立した別の存在である。「もしそうじゃなかったら」と考える事は不可能になった。「花の姿」は源氏の舞姿ではあろうが、其処に源氏に瓜二つの我が子を重ね「見まし」て、其の現実の前に藤壺は若宮命と定めて、源氏を「つゆもこころのおかれまし(一切未練は持たない)」と振り切った。そう思うと、東宮に渡された花を頭に挿して戯けて見せた源氏が道化に見えてくる。ただ之の思いは、全く以って藤壺自身が思う以外には意味を持ち得ない事であり、其れが次の文の底意だろう。

御心のうちなりけむこと(藤壺の胸の内での暗唱でしたので)、いかで漏りにけむ(どうして他人が漏り知りえる事などがありましようか)。

[第二段 宴の後、朧月夜の君と出逢う]

夜いたう更けてなむ(夜も大分更けてから)、事果てける(宴はお開きとなりました)。上達部のおのおのあかれ(高官たちは散り散りに引き上げ)、后(中宮と)、春宮(東宮も)帰らせたまひぬれば(御部屋にお帰りになって)、のどやかになりぬるに(辺りが静まり返ると)、月いと明うさし出でてをかしきを(月がとても明るく庭先を照らしていたので)、

源氏の君、酔ひ心地に(ゑひごこちに)、見過ぐしがたく(このまま大人しく帰るのが物足りなく)おぼえたまひければ(御思いになって)、「上の人びともうち休みて(後宮の女房たちも寝入って)、かやうに思ひかけぬほどに(こうした賑わいの影に)、もし(得てして)さりぬべき隙もやある(意外な隙があったりするものだ)」と、

藤壺わたりを(藤壺の部屋の周囲を)、わりなう(頻りに)忍びてうかがひありけど(嗅ぎ回って見たが)、語らふべき(手引きを頼もうと女房を呼び出す)戸口も鎖してければ(戸も錠鎖しがしてあったので)、うち嘆きて(気落ちしたが)、なほあらしに(なお飽き足らずに)、*弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば(近付いて様子を窺いなさると)、三の口開きたり(三番目の葺戸が施錠してなかった、ので源氏は細殿に潜り込みなされた)。*「弘徽殿(こうきでん、こきでん)」は帝の第一妃にして東宮の母君なる女御が住まいとする後宮第一の御殿である。殿舎の中の話となるので、間取りの概要を見ておく。図説のWebサイトが一番分かり易いがざっと文字で浚う。位置は清涼殿の北に渡殿と打橋で隣接する。母屋が南北3+1+3間(1は馬道)の東西2間と南北に長く、周りをぐるりと廂の間が囲うので全体では南北9間に東西5間の広さだった、との事。東正面で東面には廂と孫廂で2間幅の表向きが設けられ、逆に裏向きの西面は1間幅の南北に細長い廂で、是を特に「細殿(ほそどの)」と言った。話に添って見てみると次に「三の口(さんのくち)」が出て来るが、「平安京内裏を歩く」というWebサイトによると、庭の石壇を南から北に(清涼殿側から数えてだろうか)進んだ三つ目の戸で、南北に馬道(めだう、板間)で仕切られた北側の母屋に近い格子口を言うようだ。更に同サイトによると、其の北側母屋の西側には塗籠(ぬりごめ、周囲を土壁で塞いだ納屋または寝室)が設けられ納殿(をさめどの、納戸)になっていたそうで、「奥の枢戸(おくのくくると)」はその納殿の細殿に面した戸、という御膳立て。

女御は、上の御局(うへのみつぼね、清涼殿北東廂の専用控え室)にやがて参う上りたまひにければ(に宴会の後に其の儘で帝の添い寝の御用を御仕え申しなされたので)、人少ななるけはひなり(弘徽殿の殿舎には残っている者が殆ど居ないようだった)。

奥の枢戸も開きて(更に納戸の回り戸も開いていて)、人音もせず(他人の気配も無い)。

「かやうにて(こうした無用心から)、世の中のあやまちはするぞかし(男女は間違いを犯してしまうのだらうに)」と思ひて(と期待して)、やをら上りて覗きたまふ(源氏はそっと納戸に上がり込んで辺りの気配を伺いなさる)。

人は皆寝たるべし(女房たちは皆寝入っているようだが)。いと若うをかしげなる声の(とても若やいだ楽しそうな声が)、なべての人とは聞こえぬ(際立って響いて)、

「*朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて(と口誦さみながら)、こなたざまには来るものか(此方へ向かって来るではないか)。*注釈に«「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」(大江千里集、後に新古今集・春上に入集)の第五句を改変して口ずさんだ。»とある。«改変して»とは「如くもの(匹敵するもの)」を「似るもの(比肩するもの)」に替えた、という指摘。両者の言葉の幅で重複した部分を探る、みたいな。「如く(増さる)」と「似る(相通じる)」とでは違う印象。ところで、大江千里(おおえのちさと、平安中期の歌人)の詠んだ引歌は、白居易(はくきょい、白楽天)の詩文集「白氏文集(はくしもんじゅう)」にある「嘉陵夜有懐二首(嘉陵の旅寝に詠んだ詩の二首)」のうちの第2首目の中の「不明不闇朧月」の訳詩、という事らしい。「嘉陵(かりょう)」については広くは揚子江(中国長江)最大の支流という嘉陵江流域をいうらしく、春の雪解け水を湛えた朦朧とした光景だったようだ、が最近では水源の枯渇が心配されているとも聞く。その「嘉陵」の代表的な場所をいうなら、嘉陵江が長江に注ぐ四川省重慶市あたりのようだ。引用の漢詩は<單身赴任の侘しさも陽気の良さに救われる>という実感のこもった説得力あるものに思う。穿ってみれば、<千里の訳は白氏の漢詩に似るものぞ無き(遠く及ばない)>、と女の声が「聞こえぬ(響いた)」ので共感した源氏が興に乗った、とか。

いとうれしくて(源氏は間の良さに思わず納戸を飛び出して)、ふと袖をとらへたまふ(ふと袖を御引きになる)。女、恐ろしと思へるけしきにて(女は怖がって)、

「あな、むくつけ(わっ何よ)。こは、誰そ(誰なの)」とのたまへど(と言いなさるが)、
「何か、疎ましき(怪しい者では在りません)」とて(と源氏は)、

「深き夜のあはれを知るも入る月の、おぼろけならぬ契りとぞ思ふ」(和歌 8-2)

「この暗がりに入る同士、夜の情けを確かめて」(意識 8-2)

とて(と言って女を抱き上げ納戸へ連れ込むと)、やをら抱き下ろして、戸は押し立てつ(戸には突き棒を押し立てた)。あさましきにあきれたるさま(余りの事に驚く女は)、いとなつかしうをかしげなり(とても親しげで可愛らしかった)。わななくわななく(そして、ただただ震えて)、

「ここに、人」と(と言って)、のたまへど(助けを呼ぼうと為されたが、源氏が)、

「まろは、皆人に許されたれば(私の事は皆承知しているので)、召し寄せたりとも(人を呼んでも)、なんでふことかあらむ(如何にも成りません)。ただ、忍びてこそ(さあもう、お静かになされませ)」とのたまふ声に(と言いなさる声に)、この君なりけりと聞き定めて(女は男を源氏の君と気付いて)、いささか慰めけり(少しは安堵した)。

わびしと思へるものから(それでも、どうなる事かと不安で一杯の女だったが)、情けなくこはごはしうは見えじ(物怖じして頑なに拒んでは女が廃る)、と思へり(と心を決めた)。酔ひ心地や例ならざりけむ(源氏の酔い心地はいつに無く耽美に痴れて)、許さむことは口惜しきに(容赦なく思いの丈を奮い勃たせて)、女も若うたをやぎて(女も其れを若い体にしならせて受け応えて)、強き心も知らぬなるべし(正体を失くすまで貪り合った)。

らうたしと見たまふに(可愛い女だと思っている内に)、ほどなく明けゆけば(夜も明けてきて)、心あわたたし(源氏は慌てた)。女は、まして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり(何かと思ひ悩んでいる様子だった)。

「なほ、名のりしたまへ(ぜひ、名乗って下さい)。いかでか、聞こゆべき(どのように御手紙を差し上げたら良いのですか)。かうてやみなむとは(此れ切りで終えようとは)、さりとも思されじ(さすがに思われないでしょう)」とのたまへば(と源氏が仰ると)、

「憂き身世にやがて消えなば尋ねても、草の原をば問はじとぞ思ふ」(和歌 8-3)

「遊び相手に名を聞いて、暇に飽かした手慰み」(意識 8-3)

*情交後の恨み節は別れを惜しむ未練の情緒ともいえるが、若さのままに歓喜を交した今の情緒としては「憂き身世に(辛いこの世に)」は些か唐突な気がする。と思ったが、何と此れは先の源氏の歌に対する返歌だった。あの時はほぼ出会い頭に「深き夜のあはれを知るも(夜更けの風情に誘われて)入る月の(隠れる月のように籠もっては)おぼろけならぬ(弄り合っ)契りとぞ思ふ(楽しみましょう)(和歌 8-2-1)」と源氏が言い放って、女を納戸に連れ込んだ。

だから歌と言うより、まして口説き文句でもなく、ただ情熱の迸りとして発した言葉のような印象だった。し、作者も其の心算だったと思う。其れが今思い返してみれば、「深き世のあはれを知るも(深い前世での宿縁を思えば) 入る月の(いっそ月に隠れて)おぼろけならぬ(朧月夜に似るものぞなき=朧月夜のような掴み所の無い物ではなく) 契りとぞ思ふ(因果としての現世を確かめましょう)(和歌 8-2-2)」と、抹香臭くも女の鼻歌を受けた一端の和歌に仕上がっていると言う仕掛け。そこで女は源氏の「契り(因果としての現世)」と言う言葉を「うきみよ(はかない現世)」と受けた。また後節の「草の原(くさのはら)」も「草葉の蔭(墓の下=あの世)」と抹香臭い。通せば「憂き身世にやがて消えなば(はかない現世では何時か死にますが)尋ねても(今は名前をお尋ねでも)草の原をば問はじとや思ふ(墓場までは御聞きに為らないでしょう)」と、初見の客に情け深い。いや女は商売女でもないし、相手の男とも初めての情交とはいえ天下の源氏と知っての上ではあるが、それにしても色が濃い。

と言ふさま、艶になまめきたり(本当に色っぽい。そこで源氏は)。

「ことわりや(分かりました)。聞こえ違へたる文字かな(じゃ言い換えましょう)」とて、

「いづれぞと露のやどりを分かむまに、小笹が原に風もこそ吹け (和歌 8-4)

「あちらこちらをたずねたら、あちらこちらでたちばはし (意訳 8-4)

*注釈に「源氏の返歌。「草の原」を受けて「小笹が原」と詠む。「露のやどり」に女の住む家を譬喩する。「露」「笹」「風」は縁語。「風もこそ吹け」は噂が立ったら大変だの意。》とある。

わづらはしく思ふことならずは(御迷惑でなければ)、何かつつまむ(お隠しなさいますな)。もし、すかいたまふか(それとも、態と焦らしているのですか)」とも言ひあへず(とも源氏が言い終わらぬ内に)、人々起き騒ぎ(女房たちが起き出して)、上の御局に参り違ふ気色ども(まゐりちがふけしきども、上がる者下がる者たちの様子が)、しげくまよへば(忙しく騒がしいので)、いとわりなくて(今は此れまでと)、扇ばかりをしるしに取り換へて(扇子だけを後の知るしに交換して)、出でたまひぬ(納戸を抜け出さされた)。

桐壺には(源氏の部屋である桐壺舎には)、人びと多くさぶらひて(女房たちが多く仕えていて)、おどろきたるもあれば(源氏の朝帰りに驚いて起き上がる者も在れば)、かかるを、

「さも、たゆみなき御忍びありきかな(御熱心な女遊びですこと)」とつきじろひつつ(と肘を突付き合って目配せしながら)、そら寝をぞしあへる(気付かない振りで寝た真似をし合っている者もいた)。入りたまひて臥したまへれど(源氏は部屋に入って横に為られたが)、寝入られず(寝付けずにいらして)。

「をかしかりつる人のさまかな(可愛い女だったなあ)。女御の御おとうとたちにこそはあらめ(弘徽殿女御の妹君なのだろう)。まだ世に馴れぬは(生娘だったから)、五、六の君ならむかし(右大臣の五番目か六番目の姫に違いない)。*帥宮(そちのみや)の北の方(の奥方)、頭中将の進めぬ(すさめぬ、相性が悪い正妻の)四の君などこそ、よしと聞きしか(美人と聞いたが)。なかなかそれならましかば(かえってそうした相手だったら)、今すこしをかしからまし(もっと面白かったものを)。 *師當は「源氏の弟、後の螢兵部卿宮」との事。

六は春宮にたてまつらむところざしたまへるを(六の君は皇太子に嫁ぐ御積りでいらっしやるので)、いとほしうもあるべいかな(もしそうなら気まずい事になるかもしれない)。わづらはしう(余り頻繁には)、尋ねむほどもまぎらはし(調べ難いし)、さて絶えなむとは(女も此れ切りで終わろうとは)思はぬけしきなりつるを(思っていない様子だったが)、いかなれば(どうして)、言通はずべき(ことかよはずべき、手紙を遣り取りする)さまを(宛先を)教へずなりぬらむ(教えず終いに為さったのだらう)」

など、よろづに思ふも(あれこれ考えるにも)、心のとまるなるべし(気掛かりな事があった)。かうやうなるにつけても(何れにせよ)、まづ、「かのわたりのありさまの(藤壺の周囲の状態は)、こよなう奥まりたるはや(嚴重に戸締りされていたものだ)」と、ありがたう(とても忍び込めない)思ひ比べられたまふ(源氏は弘徽殿舎と藤壺舎を比べて考えておられました)。

[第三段 桜宴の翌日、昨夜の女性の素性を知りたがる]

その日は後宴(ごえん、内上げ)のことありて(が行われて)、まぎれ暮らしたまひつ(源氏は忙しく過ごされた)。箏の琴仕うまつりたまふ(十三弦の演奏をお勤めなさる)。昨日のことよりも(昨日の大宴会よりも)、なまめかしうおもしろし(打ち解けて面白かった)。藤壺は(藤壺宮は)、暁に参う上りたまひにけり(早朝に清涼殿の上の御局に御上がりに成って居らした。その姿に源氏は昨夜の右大臣家の姫君を思い出されて、)。

「かの有明(まだ月が残る夜白みに別れた彼の姫君は)、出でやしぬらむ(もう御所を出て右大臣家にお帰りに成った時分だろうか)」と、心もそらにて(関心が空へ向かって)、思ひ至らぬ限なき(気心の知れた)*良清(よしきよ)、惟光(これみつ)をつけて(に言い付けて)、うかがはせたまひければ(弘徽殿周辺の様子を探らせて居らしたが)、御前(おまえ、御所表の宴席)よりまかだたまひけるほどに(から下がって宿直所の桐壺舎に戻られると)、 *「良清」は北山へ同伺した源氏の側近の一人。播磨守の子として紹介されていたが名前は此处で初出。ただし此处でもこの人物の説明は無く、「良清」が播磨守の子と明示されるのは後の「須磨の帖」での事、という。

「ただ今、*北の陣より、かねてより(早くから)隠れ立ちて(壁際には)はべりつる(控えていた)車ども(牛車数台が)まかり出づる(出発いたしました)。 *「北の陣」は、「内裏の北の朔平門(さくへいもん)にあった兵衛府(ひょうえふ)の陣(詰め所)。また、朔平門の別称。(Yahoo 辞書)」とある。此处より内は乗り物は禁止された。わずかに「輦車の宣旨(てぐるまのせんじ)」を帝から許可された最高位の者だけが、此处で手車に乗り換えて内裏を乗り物に乗ったまま通行できた、との事。

御方々の(御来賓の方々の)里人はべりつるなかに(お邸からの御迎えが在る中で)、四位の少将(しみのせうしやう、殿上の近衛)、右中弁(うちゅうべん、太政補佐の高官)など急ぎ出でて、送りしはべりつるや(お送り申していたのが在りましたので、それが)、弘徽殿の御あかれならむと見たまへつる(弘徽殿筋の来賓であろうかと推察いたします)。けしうはあらぬ(万全を期した)けはひどもしるくて(様子が有り有り度)、車三つばかりはべりつ(車三台連ねていました)」と聞こゆるにも(との報告に)、胸うちつぶれたまふ(源氏は暗然と為さる)。

「いかにして(三台も在ってはどのように)、いづれと知らむ(探り当てようか)。父大臣(ちちおとど、父親の右大臣)など聞きて(などが気付いて)、ことことうもてなさむも(大袈裟な事に成ったら)、いかにぞや(面倒だ)。まだ、人のありさまよく見さだめぬほどは(相手の事情が良く分からないうちは)、わづらはしかるべし(慎重に振舞うべきだろう)。さりとて(かといって)、知らであらむ(相手が分からない儘では)、はた、いと口惜しかるべければ(余りに残念だし)、いかにせまし(どうしたものか)」と、思しわづらひて(思案に暮れて)、つくづくとながめ臥したまへり(答えの出ないまま暫く横になって御出ででした)。

「姫君(二条院の若草の姫は)、いかにつれづれならむ(どうしているだろう)。日ごろになれば(数日帰っていないので)、屈してやあらむ(悲しんでいるだろうか)」と(と其の内にふと)、らうたく思しやる(労しく思い出しなされる)。

かのしるしの扇は(かと思えば、また彼の扇を見直せば)、桜襲ねにて(表は白で裏が赤の桜襲ねで)、濃きかたにかすめる月を描きて(赤地に霞む月を描いて)、水にうつしたる心ばへ(水に映した図柄は)、目馴れたれど(有り触れていたが)、ゆゑなつかしうもてならしたり(人柄が俤ばれる様に使い慣らして在る)。「草の原をば」と言ひしさまのみ(詠んだ姿が)、心にかかりたまへば(印象深く)、

「世に知らぬ心地こそすれ有明の、月のゆくへを空にまがへて」(和歌 8-5)

「見失ったら見つけたい、無くては成らぬ有明の月」(意識 8-5)

と書きつけたまひて(そう扇に書き添えて)、置きたまへり(お置きに為った)。

[第四段 紫の君の理想的成長ぶり、葵の上との夫婦仲不仲]

「大殿にも久しうなりにける(左大臣家の正妻にも久しく会っていない)」と思せど(と源氏は御思いに成ったが)、若君も心苦しければ(若草の姫君も気になって)、こしらへむと思して(宥めて置こうと御思いに成って)、二条院へおはしぬ(二条の院へ御向かいに成りました)。

見るままに(見れば見るほど)、いとうつくしげに生ひなりて(とても可愛らしく成長して)、愛敬づきらうらうじき心ばへ(愛らしく物覚えの速い性質は)、いとことなり(格別であった)。飽かぬところなう(存分に)、わが御心のままに(思い通りに)教へなさむ(教育しよう)、と思すにかなひぬべし(との思いに適っていたようだった)。男の御教へなれば(ただ男の考えで躰けたので)、すこし人馴れたることや(少し生意気な)混じらむと思ふこそ(面が無いかと)、うしろめたけれ(源氏には気掛かりではあった)。

日ごろの御物語(花の宴の様子を話して聞かせたり)、御琴など教へ暮らして(琴をお教えに成ったりして過ごされてから)出でたまふを(源氏が大殿へお出掛けなさるのを)、例のと(またお出掛けなさるのかと)、口惜しう思せど(姫は寂しかったが)、今はいとようならはされて(今ではもう良く聞き分けて)、わりなくは慕ひまつはさず(泣き拗ねる事も無かった)。

大殿には、例の(正妻はいつものように)、ふとも対面したまはず(直ぐには御会い為されませんでした)。つれづれとよろづ思しめぐらされて(源氏は所在無く色々思い巡らし為されて)、箏の御琴まさぐりて(十三弦を手慰んでは)、

「*やはらかに寝る夜はなくて」とうたひたまふ。 *注釈の説明で、この歌は催馬楽の「貫河(ぬきかは)」という曲、とあった。歌詞は「貫河の瀬々の柔ら手枕 柔らかに寝る夜はなくて 親離くる夫 親離くる妻は増してるはし しかさらば矢矧の市に杳買ひにかむ 杳買はば線鞋の細底を買へ さし履きて表裳とり着て宮路通はむ」とある。背景が不明なので字面で解釈する。「ぬきかは」については「矢矧の市(やはぎのいち)」が後節にあるので、愛知岡崎の矢矧川の事かもしれないが、其の市が立つ「矢作(矢作りの盛んな竹の産地)」自体も場所の特定を示す参照が見当たらないので、此処では「男女を結ぶ河」の意味か「実際に詠み手の通い道に沿って流れていた川」を想定する。「瀬々の(せぜの)」は「さらさら」という擬音。「柔ら手枕(やはらたまくら)」は前句を受けて「恋路を通う川の瀬音の様に柔かい手枕で」と読む。「柔らかに寝る夜はなくて(やはらかにぬるよはなくて)」は「添い寝も出来ない」。「親離くる夫(おやさくるつま)」は「親が引き離す良い人に」。「親離くる妻は(おやさくるつまは)」は「親に仲を裂かれた女は」。「ましてるはし」は意味不明で音で然う聞こえる言葉を補えば「まして(う)るはし」で「更に恋焦がれて」。「しかさらば」は「然らば=ならばいっそ」。「矢矧の市に」は「賑わう市場に」。「杳買ひにかむ(くつかひにかむ)」も舌足らずで「くつかひに(行)かむ」か「靴買ひに(掛)かむ」と何れにしても「靴を買いに行く序でに」。「杳買はば」は「靴を買うとしたら」。「線鞋の細敷を買へ(せんがいのほそしきをかへ)」については靴の説明で、甲皮絹布革底の室内履きの線鞋に木のヒールを付けた女物の草履のようで、だから「おしゃれな靴を買って」。「さし履きて」は「其れを履いて」。「表裳とり着て(うはもとりきて)」は「コートを羽織って」。「宮路通はむ(みやぢかよはむ)」は文字通りだと(京へ上ろう)にも見えるが、歌意を汲めば「通う」が普通は(男が女の許に行く)事に対して、(上に(宮路)行く)と読めるので「女の方から押し掛けよう」となるのだろう。通して見直せば華やぎのある軽い歌で、当時としては戯れ歌のようでも今と成っては理解に手間取るが、要するに顔を見せない正妻に対して、男に会いたい女は拗ねて居ないで女の方から会いに来ればいい、と嘯いて見せたわけだ。それを養父の家で謡うということは、正妻が我を張るのは親の躰が悪いからだ、左大臣を難じている、か少なくとも其の含みが在って源氏はこの歌を持ち出している。不満の捌け口を正確に相手の弱点に向けるイヤなヤツだ。

(すると其の歌声を聞きつけてか、)大臣渡りたまひて(養父の左大臣が源氏の部屋の舎殿に遣って来為されて)、一日の興(ひとひのきょう、先日の花の宴で見事に舞った源氏の)ありしこと(有様を)、聞こえたまふ(お褒め為さる)。

「ここらの齢にて(よはひにて、この歳になるまで)、明王の御代(めいわうのみよ、歴代の帝を)、四代をなむ(しだいをなむ、四代に渡って)見はべりぬれど(見てまいりましたが)、このたびのやうに、文ども(ふみども、詩作が)警策に(きやうざくに、佳作揃いで)、舞、楽(曲)、物の音(演奏)どもととのほりて(と三拍子揃っていて)、齢延ぶることなむはべらざりつる(寿命が延びる思いをした事はありませんでした)。道々のものの上手ども多かるころほひ(元々が其々その道の上手な所に持ってきて)、詳しうしろしめし(詳しく打ち合わせして)、ととのへさせたまへるけなり(しっかり練習をされたのでしょう)。*翁もほとほと舞ひ出でぬべき心地なむしはべりし(この老いぼれもつい踊り出したくなるような気が致しました)」と聞こえたまへば(と大臣が申しなさると源氏は)、 *「翁もほとほと舞ひ出でぬ」という言い方は「百十三歳の尾張連浜主が仁明天皇の御前で長寿楽を舞った」という故事(『続日本後紀』承和十二年正月条)を踏まえる、と注釈に在る。「尾張連浜主(お

はりのほまぬし)」は平安初期の雅楽家で、高齢にして初春を祝う「春鶯囀(しゅんのうでん)」を舞ったという事から、後述の「栄行く春」を左大臣が舞ったら」という連想に繋がるらしい。

「ことにととのへ行ふこともはべらず(特に準備はしていませんでした)。ただ、公事に*そしうなる(宴席で演舞を勤める役の)物の師どもを(舞楽の名手を呼んで)、ここかしこに(其々に得意の要点を)尋ねはべりしなり(聞いていただけです)。*「そしう」の語法は古文においても源氏物語の一例しかなく意味不明、と注釈にもあるが、ならば正に此れは<永遠の謎>の一つではないのか。という事は、何とか説明が付くなら如何様に言い換えても良い、という事だろうか。むしろ専門家が分からないのだから、些末なりにも、ざっくり考えよう。此処の文は源氏の地位や役職を踏まえて前後の意味を考えるなら、「物の師どもを(呼んで)此処彼処に(芸の壺を)」「ただ尋ねはべりしなり」事が主旨だろうから、其の「物の師」の形容として「公事(おほやげごと)にそしうなる」を考えれば良さそうだ。そこで、そんなに分けが分からない語法なら可能性の一つに「公事に勤しうなる(いそしうなる)」の聞き損じという風に考えてみると、巧く<「物の師」の形容>になった。

よろづのことよりは(そんなことより、頭君が舞った)、「柳花苑」、まことに(あれこそ実に)後代の例(こうだいのれい、後世の手本)ともなりぬべく(ともなるだろうと)見たまへしに(拝察いたしました)が、まして(更に大臣が尾張浜主を倣って)「さかゆく春」に立ち出でさせたまへらましかば(一舞披露為されていたなら)、世の面目にや(どれほど面目を)はべらまし(施した事でしたでしょうか)」と聞こえたまふ(と御答え申しなさる)。

弁、中将(そのうち君達の頭の弁や頭の中将)など参りあひて(なども集まって来て)、高欄に背中おしつ(もたれながら)、とりどりに物の音ども調べ合はせて遊びたまふ、いとおもしろし(とても素晴らしかった)。

[第五段 三月二十余日、右大臣邸の藤花の宴]

かの有明の君は、はかなかりし夢を思し出でて(一夜限りの情交を思い出して)、いとも嘆かしうながめたまふ(ずっと物思いに耽ってお過ごしでした)。春宮には(東宮への輿入れは)、卯月ばかりと思し定めれば(四月ごろと予定されていたので)、いとわりなう思し乱れたるを(日が迫るほどに未練が増して)、

男も(源氏も)、尋ねたまはむに(女の素姓を探るのに)あとはかなくはあらねど(跡形無しではなかったが)、いづれとも知らで(右大臣家の姫君とは分かっても何番目の姫かが分からず)、ことに許したまはぬあたりに(まして源氏に気をお許しにならない弘徽殿筋の女に)かかづらはむも(関係を持つのも)、人悪く(立場を悪くし兼ねないかと)思ひわづらひたまふに(思い悩んでいらした所)、

弥生の二十余日、右の大殿の(右大臣邸に於ける)弓の結(ゆみのけち、弓競技会)に、上達部、親王たち多く集へたまひて、やがて(其の後)藤の宴(ふじのえん、藤のお花見を)したまふ(催しなさる)。花盛りは過ぎにたるを、「*ほかの散りなむ(他の花が散った後が咲き頃)」とや(とても)教へられたりけむ(教えられたかのように)、遅れて咲く桜、二木(ふたき、二本)ぞ(こそが)いとおもしろき(とても美しい)。*注釈に<<『源氏積』は「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし」(古今集、春上、六八、伊勢)を指摘。>>とある。

新しう造りたまへる殿を(新築した舎屋は)、宮たちの(弘徽殿腹の内親王たちの)*御裳着の日(おんもぎのひ、御裳着の儀式に備えて)、磨きしつらはれたり(飾り立てられていた)。*「裳着」は《主に平安時代、公家の女子が成人したしるしに初めて裳をつける儀式。結婚前の12、3歳ごろ、吉日を選んで行った。着裳(ちやくも)。(Yahoo 辞書)》とある。儀式としては成人式だから、男の「元服」にあたるのだろうか。然し「元服」が実質では「床初め」であり、以降は生活上も大人の振舞いが規定されている事に比べれば、「裳着」は儀式自体の晴れ姿が重要に思える。尤も、射精や初潮という生体変化は元々儀式とは別に自覚するものだし、貴族だけが特別な種目では在り得ないが、絵や道具を使った性教育としての「床慣らし」は始まったかもしれない。

はなばなともものしたまふ(派手好みでいらっしゃる)殿のやうにて(家風の御様子で)、何ごとも今めかしうもてなしたまへり(何事も今風に作られていました)。

源氏の君にも、一日(ひとひ、先日)、内裏にて(うちにて、宮中で)御対面のついでに、聞こえたまひしかど(右大臣は宴へのお誘いを御案内申しなされて居らしたが)、おはせねば(光君が宴に御出でになっていなかったの)、口惜しう(残念な)、ものの榮なしと思して(折角の催しも地味に思えて)、御子の(御子息の)四位少将を奉り給ふ(たてまつりたまふ、文遣いに出して御迎えに向かわせ為さる)。

「わが宿の花しなべての色ならば、何かはさらに君を待たまし」(和歌 8-6)

「色とりどりの花々が、お待ち申して御座います」(意識 8-6)

内裏におはするほどにて(源氏は右大臣の文を御所で受け取ったので)、主上に奏したまふ(お上にお見せ申しなさる)。

「したり顔なりや(背負ってるね)」と笑はせたまひて(と帝はお笑い為されて)、

「わざとあめるを(わざわざ迎えを寄越したのだから)、早うものせよかし(早く行って御遣り為さい)。*女御子たちなども、生ひ出づるところなれば(大きくなっただろうから)、なべてのさまには思ふまじきを(随分変わっているんじゃないかな)」などのたまはず(などと仰る)。*「女御子」とは帝自身の子の筈だが、それにしては他人行儀な距離感を感じる。然し当時の常識からすれば、御所育ちの光君の方が異常だった。弘徽殿腹の御子たちは右大臣家で育てられたのであり、だからこそ実家である後見家の実力が其の御子の地位の処遇に決定的にモノを言ったのである。同じ弘徽殿腹でも第一皇子は立太して東宮御所に住まうが、御子とはいえ他の帝の種子は女方の実家に住まい、用が無ければ参内はしない。ただ、娘の成長振りが分からないほど遠い所に居たとは、物理的にも心理的にも納得しがたいので、違和感が残る。

御装ひなどひきつくろひたまひて(源氏は宴席用に着替え為されて)、いたう暮るるほどに(だいぶ日が暮れてから)、待たれてぞ(待ちに待つ右大臣邸に)渡りたまふ(お出掛けなさる)。

*桜の(桜の色柄の)唐の綺の(からのきの、唐風の浮織りの)御直衣(おんなほし、上着に)、葡萄染(えびぞめ、赤紫色)の下襲(したがさね、内着の)、裾(しり、後身頃を)いと長く引きて(とても長く引き出した源氏の衣裳だった)。*此処の描写は言い方が分からないという事よりも、装束の着こなし自体が分からない事が基本的な問題だ。ざっと整理すれば、先ず下着の薄衣を着る。そして単衣の着物を着

る。そして袴を穿く。そして此処からが礼装で、上着の下着として「下襲」という腰丈のシャツを着る。のだが、このシャツが曲者で燕尾服みたいに後身頃が長い。実は西洋式のシャツにも背中身頃が奇妙に長いものがある、禪の様に前を覆う形があった気がするが、仮に其等に何処か共通点があったとしても、この「下襲」は床を引き摺るほど長い。女の裳のように上着からはみ出してずるずる引き摺る。尤も、此れも西洋のスカートにも似たような物が在った気もするが、私などには此れは一見、優雅というよりは無様で滑稽にすら思える。何でそうなるの、か。其れは多分、現代の三人称の、というか客観的な視点での、というかテレビでイラクの空爆を見るような第三者の立場で、世界を見る習慣に馴れ馴らされた生活感には、虚栄や虚飾にしか見えない「下襲の裾」のような無用な長物だが、この物語のような一人称や二人称の世界では、即物的な豊かさや優位を示していたからではないか、という気がする。例えば、装飾の裾を持つためだけに左右に人を従がえて現れた人物の威圧感には、其の場に居たら圧倒されるに違いない。正に畏れ入る、と言う所だ。さて、其の上での上着となる「直衣」については、此れは形状は正装上衣の立丸襟の「袍(ほう)」と同じだが、正装は色が黒なのに対して直衣は色柄が自由で、一般的には貴族の普段着だったらしい。従って、他の者が正装で居る時にこの略礼装が許されるという事は、身分の高さおよび客分としての立場を示している。という事は、源氏がこの時に着ていた直衣の色柄は、光君の右大臣に対する主観的および客観的な立場を示している、という事になる。以上で着こなしをざっと踏まえたとして、改めて此処での源氏の衣裳を見ると先ず「桜の」とある。此れは「桜襲(さくらがさね)」の色合いの事、らしい。「桜襲」は裏地付きの服の表地が<白>で裏地が<二藍(ふたあい)>の袷着で表地が薄い織物なので、淡い玉虫風な<二藍>の直衣、を言う。その<二藍>がまた、赤と青の二色の割合で赤っぽくも青っぽくもなるのだが、「桜」の場合は相当赤っぽく表地の白色を透かせばピンク色だったらしい。次の「唐の」は唐風か唐製かで、浮き織り模様か上等品の事なのだろう。「綺」は特に古代式の織物の事で、撚りを掛けない糸で織った美しいが脆い贅沢品だったようだ。質実より華美を尊んで優位性を誇示した、のだろうか。殊更であれば、多分そうなのだろう。

皆人は(他の参列者は並べて右大臣に敬意を表して)表の衣(うへのきぬ、黒礼装)なるに、あざれたる(源氏一人がくだけた)大君姿(おほきみすがた、宮家装束)のなまめきたるにて(の雅な姿で)、いつかれ(敬われて)入りたまへる御さま(入場為される御様子は)、げにいと異なり(実に何とも格別で御座います)。花の匂ひもけおされて(花の匂いさえしぼんで)、なかなかことざましになむ(花見の宴席が霞むほどです)。

遊びなど(管絃などを)いとおもしろう(とても楽しげに)したまひて(演奏なさったりして)、夜すこし更けゆくほどに(夜も少し更けた頃)、源氏の君、いたく酔ひ悩めるさまに(少し酔い過ぎた様な)もてなしたまひて(振りをなさって)、紛れ立ちたまひぬ(酔い覚ましにと人目を避けて席を立たれた)。

寝殿に(主殿には)、女一宮、女三宮のおはします(第一内親王と第三内親王がお住まいです)。東の戸口におはして(源氏は其の東の妻戸口に)、寄りあたまへり(近付いてお座りなさる)。藤はこなたの(藤の花はこの東側の)妻(つま、軒先)にあたりてあれば(に面した壺庭に咲いていたので)、御格子ども上げわたして(格子戸を開き上げて)、人びと出でゐたり(女房たちが御簾際に座って花見をしていた)。袖口など(その女房たちの袖口が)、踏歌の折おぼえて(新年舞踏会の開放的な観客席のように)、ことさらめきもて出でたるを(態とらしく御簾の下から出ていたのを見て源氏は)、ふさはしからずと(はしたないと付け入る隙を覚えながらも)、まづ(ふと舞踏会でも慎ましかつた)藤壺わたり思し出でらる(藤壺の面影を思い出しなさる)。

「なやましきに(弱いのに)、いといたう強ひられて(酒を無理強いされて)、わびにてはべり(酔い過ぎました)。かしこけれど(畏れ入りますが)、この御前にこそは(姫宮には兄妹の誼で)、蔭にも隠させたまはめ(庇って匿って下され)」とて(と言って源氏は)、妻戸の御簾を引き着給へば(ひききたまへば、潜り込みなさって)、

「あな、わづらはし(あら、どうしましょう)。よからぬ人こそ(此処は困ります。)、やむごとなきゆかりは(兄妹の御縁などとは)かこちはべるなれ(言い訳で御座いましょう)」と言ふけしきを見たまふに(と答える女房たちの様子を御覧になると)、重々しうはあらねど(仰々しくは無いが)、おしなべての若人どもにはあらず(並大抵の若女房たちでは無く)、あてにをかしきけはひしるし(上品で弁えた物腰がはっきり感じ取れた)。

そらだきもの(室内香を)、いと煙たう(けぶたう)くゆりて(燻らせて)、衣の音なひ(衣擦れの音も)、いとはなやかにふるまひなして(とても派手に立てる機敏さで)、心にくく奥まりたるけはひはたちおくれ(慎ましい奥ゆかしさは見られず)、今めかしきことを好みたるわたりにて(新し物好き達ばかりの)、やむごとなき御方々(当家の姫君たちの)もの見たまふとて(花見の席として)、この戸口は(この東廂は)占めたまへるなるべし(用意されていたものの様だった)。

さしもあるまじきことなれど(そうとは思っていなかった源氏は)、さすがにをかしう思ほされて(俄かに先日の有明の君を思い出し為されて)、「いづれならむ(どの御方だろう)」と、胸うちつぶれて(この中にあの姫が居ると確信なさって)、

「扇を取られて、からきめを見る(大変でした)」と、うち(態と)おほどけたる声に言ひなして(おどけた風を装って)、寄りみたまへり(近付いてお座りになる)。

「あやしくも(何だか)、さま変へける*高麗人かな(ちょっと変なコマウドですね)」といらふるは(と答えた女は)、心知らぬにやあらむ(事情を知らないに違いない)。*源氏の「扇を取られて、からきめを見る」に対して「さま変へける高麗人かな」という応対は、催馬楽の「石川」という歌を下敷きにして成立している。「石川」は老女の典侍を巡る戯れで源氏が頭中将に帯を返す時に添えた歌の下敷きにも使われた催馬楽だった。<なかつたえ(中絶え=恋の終わり)>に関する歌で、其の歌い出しの歌詞に「石川の高麗人に帯を取られて辛き悔する」、とある。その「辛き悔する」を「辛き目を見る」に源氏が変えた事を「さま変へける高麗人」と、女は評した。貴人同士で成立する言葉遊びの会話だが、肝心の「扇」を「あやしく」思うのでは、その「扇」の持ち主を探す源氏の真意は通じていないので、この女は別人と知れる。

いらへはせで(何も答えず)、ただ時々、うち嘆くけはひする方に(溜息を吐いている女の方へ)寄りかかりて(近付いて)、几帳越しに手をとらへて(源氏は几帳越しに手を取って)、

「梓弓いるさの山に惑ふかな、ほの見し月の影や見ゆると (和歌 8-7)

「山に隠れた月影を、目指す射る矢の頼りなさ (意識 8-7)

*「梓弓(あづさゆみ)」は《アズサとよばれる木でつくった丸木弓。アズサは木竹合成弓が考案される平安時代中期まで弓材として用いられ(Yahoo 百科)》た、とある。また注釈に《源氏の贈歌。「梓弓」は「射る」の枕詞。「いる」

は「射る」と「入る」の掛詞。今日の「弓の結」にちなみ「入る」「弓」を詠み込んだ。「いるさの山」は但馬国の歌枕。「ほの見し月」は女を喩える。≫とある。「弓のケチ」に因んだだけでなく、「弓射る」に花宴での弘徽殿舎納戸での源氏の射精も掛けているからこそ、この歌のイヤラシサ、即ち趣きが深まっている事は言うまでもない。

何ゆゑか(分かりますよね)」と、押し当てにのたまふを(と源氏が心当てに言いなざると)、え忍ばぬなるべし(女もさすがに堪え切れなかったのだろう)。

「心いる方ならませば弓張の、月なき空に迷はましやは」(和歌 8-8)

「頼りないとは頼りない、闇夜に心眼過たず」(意識 8-8)

*注釈に≪贈歌の「いるさの山」の「いる」と「梓弓」の「弓」を引用する。「心入る」は「入る」と「射る」の掛詞。「弓張の」は「月」の枕詞。また「入る」は「月」の縁語でもある。気持ちが薄いから迷うなどということをするのですと、切り返した返歌。≫とある。この日が二十三日なら下弦の月(3/4)でちょうど「弓張り月」になる。

と言ふ声(と答えた声で)、ただそれなり(この女が正に其の人だったと知れたのです)。いとうれしきものから(何と嬉しいことに)。

(2009年4月22日、読了)